

## ペルシアを旅した旅行家たち

—金子民雄さん講演録—

### 第 1 部

ペルシアに入った日本人、マルコ・ポーロの「東方見聞録」に見る暗殺者教団と、ペルシアの詩人オマル・ハイヤーム

雲南懇話会の代表幹事、前田栄三さんから、なにか話して欲しいと言われましたが、すっかり困ってしまいました。少々考えた末に、それではかつてのペルシャ、今いうイランについて、19 世紀から 20 世紀にかけての旅行者を通して、歴史的背景を絡めて話してみてもどうかと思いました。改めてこれまで蒐集した乏しい蔵書を今一度調べてはみたものの、詳しいことはすっかり記憶から忘れ去られており、途方に暮れるばかりでした。

ペルシャは日本とあまり歴史的にも関わりがあったようではありませんから、ともかく 19 世紀以降、ペルシャ地方を旅した人たちのことを追いかけていったらどうかと、勝手に想像することにしました。そして出来たら日本人のことにも触れてみたいと思いました。

すでに皆さんもよくご存知と思いますが、古来ずっとペルシャとして親しまれていた国名は、1935 年（昭和 10 年）にイランと改名されました。ただここではペルシャを使うことにします。

ペルシャ、いま言うイランという国は、現在でもずっと遠い国ですから、まして古来、日本人が行くことはまずあり得なかったと思われるでしょう。まして明治以前には、絶無ではなかったかと。資料的裏付けもありませんから。

ところが 8 世紀のわが国の奈良時代、ちょうど奈良の大仏が造られる頃、驚いたことに沢山のペルシャ人がわが国に来ていたことが、当時の記録『続日本紀』の中に見えます。それが単なる交易か労働で来たのかと思っていましたら、男だけでなく女性も来ていたようです。だいたい一般の日本の歴史教科の中では、ペルシャ人が日本に少なからず来ていたことなど、学校で学んだ記憶もありません。しかし、これは事実でした。普通ならシルクロードを通して、中国経由で日本に来たのではないかと思うのですが、これは女性にはきつすぎます。どうやら彼らは海のシルクロードを通して、船で来たようです。

南シナ海に入ったとき、1 年に 2 度風向きが変わりますから、来たときは北向きの風、帰るときは南向きの風に乗ってインド洋に去って行きました。ペルシャ人がなぜそれほど多く当時日本に来ていたのか、私は詳しい理由が分かりません。ただ正倉院に遺っているガラス器具などの中には、輸出用に運び込んだものばかりでなく、彼らが日用品として使うためのものも入っていたかもしれません。

話が脱線しますが、正倉院にはたしか大きな樽があります。あの樽にはなにが入っていたのでしょうか。ワインではなかったでしょうか。日本ではこれに入れる代用品がないと、ただの容器になってしまいかねませんが、私にはワイン樽のような気がしてなりません。葡萄酒は薬用品だったと思います。

正倉院には、ガラスの容器があります。いまもイランに行きますと、かつてのガラス製品がいろいろ博物館に展示されています。ただ永年にわたって晒されてあったので、風化してしまってガラスの表面が曇ってしまって、綺麗ではありません。ガラスが一番透明で綺麗なのはなんといっても、正倉院の所蔵品です。ですから、日本が世界で一番すばらしいものをもっていることになり。私の友人たちが以前よくイランにガラス容器の調査に行っていて、楽しい話を聞かせてもらったものです。

ペルシア産のワインについては、あとでまた別にお話したいと思っておりますが、確か西暦 752 年、10 年ぶりに奈良の大仏が完成したとき、たしかこの開眼供養のトップに座ったのは、インド人だったと聞きましたが、ここで興味深いことは、この大仏開眼供養を施した聖武天皇が、集まった人々に配ったのが茶だったということです。

ワインに次いで茶ですが、歴史的にはわが国に茶が入って来たのは、このときより百年ほど後になるようですが、グリーン・ティーが日本にもたらされたのは、ずっと早かったように思います。

話はますます脱線して、嘘か本当か分からなくなって来ましたが、まあ単なるお話しとして聞いてください。グリーン・ティーもワイン同様、薬用として珍重されていたようです。絹を作るお蚕は元々は騎馬民族が、飼育していたといわれます。しかし、騎馬民族の悩みは薬品で、それが緑茶だったといわれます。そこで彼らは茶と交換条件で蚕の飼育法を教えたといわれます。茶葉は当然、ペルシアに輸出されていたでしょう。これはずっと時代が下りますが、19 世紀の中頃、シルクロードを旅していた英国の旅行者が、沙漠の中から乾燥した茶葉を見つけたといわれます。この茶葉を乾して押し固めたものが磚茶でした。これがシルクロードの市場で売られていたということです。

## 日本人とペルシアとの関わり

長い間、本当に日本とペルシアとの関係は途絶えたままでした。分かる限り千年ぐらいでしょうか。ではわが国が公式にペルシアと関わったのはいつ頃のことかと言いますと、なんと明治 13 年 (1880 年) のことからです。このときどういう形だったかといえますと、ペルシアという遙か遠い国と国交を開くべきかどうか、明治政府の日本外務省が考えて、ともかくペルシアという未知の国に出かけ、どういう国なのか直接見て判断しようと考えたのでした。このとき奈良時代の頃に、実際ペルシア人がすでに沢山来ていたという、そういった古い歴史には全然気付いている風ではありません。正倉院にそういった古いペルシアの品があることにも、そうははっきり気付いていたように思えません。

そのためいざペルシアに行こうにも、どんな準備をしてよいのか随分困ったようです。そこでともかく外務省の理事官だった吉田正春と、あと一人は陸軍参謀本部の古川宣誉—この人の名前はヨシゲと読むのかヨシモトとするのかよく分からないのですが—この二人が中心となって出かけて行きます。

この吉田と古川という人は、皆さんもご存じかと思いますが、各々帰国後に報告書を書いています。吉田正春という人は、明治維新の時、土佐藩の参政だった吉田東洋の長男でした。明治新政府になったとき、外務省の官吏となり、今回指名されてペルシア使節団を率いる責任者として、ペルシアに行ったようです。彼のどういった才能を買われて抜擢されたのか、よく分かりません。

むしろなぜこの時期、ペルシアが選ばれたのか、このことは彼の報告書である『ペルシアの旅』(『回疆探検・汎斯之旅』)の中で書かれているのですが、これをお読みになれば判ります。ちょうどこの頃、時のペルシア皇帝のナスール・ウッディーン・シャーという王様が、ロシアに行っていました。このときロシアの帝都サンクト・ペテルスブルグに、明治政府から派遣された特命全権公使の榎本武揚と書記官の西徳二郎がいて、このペルシア皇帝が日本と国交を樹立したいという依頼があったようで、そこで本国(日本)の外務省に早速連絡したようです。当時のわが国の外務大臣が井上馨で、それならちょうどよい機会だから、ペルシアに使節団を派遣しようじゃないかとなったらしい。このとき日本側になにか理由があったのか、当時、石油など考えも及ばぬ世界でしたから、国交の直接はよく分かりません。多分、国際的な視野の広がった西徳二郎あたりの説得が大きかったのではないのでしょうか。

そこでこの二人の代表者の他に、大概はカットされてしまうのですが、実はいろいろな商売、金具を作ったり、焼き物を作ったりといったいま言う商工業者の代表四名が参加したのでした。これはいまから見ても大変ユニークな発想だったと思いますが、残念ながらこの成果がどうだったのかさっぱり不明です。

或いはガラス製品が古くからペルシアでは作られていて、そういうことを薄々知っている人もいて、このことを調べに行ったのではないかという予測もできます。話がすぐ脱線してしましますが、古来ペルシアのガラス製品は有名でした。そうした見本が奈良の正倉院にもある通り、よく知られています。明治政府はあるいは商業用の製品として、ガラス製品にもあるいは注目していたのかもしれませんが。こういった点になると、資料がないのでまるっきり分かりません。ただこのガラス製品については、あとでまた出て来ますので、ご記憶下さい。

ペルシアを旅していると、ふと思い出されることが多いです。たとえば足元の石ころを蹴飛ばしただけでも、それが転がって行ってぶつかった所から、次々と様々な歴史が浮かび上がり、結びついてくるようです。実際、このことが出来ないとペルシアを旅してもつまらないし、なんの意味もないようです。本題から外れて、次から次へと横道にそれてしまうのが、ペルシアの旅のようです。

前にも、アメリカの行動を批判というか揶揄したことがあるのですが、アメリカはペルシアの素晴らしい伝統芸術も歴史的背景も知らないで、すぐ爆弾を持って行って落すことしか発想がないようです。もしペルシアという国のことを知っていたら、つまらぬ戦争なんかやっている暇はないと思うのですが、残念ながらわが国でも大同小異、同じで、ペルシアと古い結びつきがありながら、すぐ損得勘定に走ってしまい、石油以外は頭にないでしょう。

ではこの明治期、日本の使節団はどういうルートで、ペルシアに向かったのかということになります。いまは航空機で、一般にペルシア湾岸のドバイ空港辺りから、一気に北上してテヘランに行ってしまいますが、かつてはペルシア湾の奥のブシール港まで行って、ここから北に向って陸路テヘランに行ったものでした。この間せいぜい 700km ほどの距離ですが、ここをてくてく歩くとなると大変です。ただこの途中には古来有名な町々がずっと繋がって続いており大変楽しいのですが、ここでは省略いたします。

このとき 2 人の書いた旅行記録は、いまでは大変な稀覯本になってしまい、古本屋でもめったに見かけません。ただ吉田正春の書いた薄手の「ペルシヤの旅」は、中公文庫として出ています。いま一人の古川宣誉の紀行本は明治 24 年に「波斯紀行」と題して、出版されています。和綴じ本で立派な報告書なのですが、文体が漢文調なのでいまの人には扱い難いかもしれません。

以前、これを現代文にしようと思ったのですが、出版社が二の足を踏んで果たせませんでした。すぐコピー版を作ろうとするのですが、作っても読めないでしょう。

この日本政府正式の公使の他に、両国はずっと外交関係は中断したままで、では他に旅行者はいなかったのかと言うと、たださっと通った人が数人いたようですが、詳しいことは分かりません。せめて遺された記録だけでも纏めたらよいと思うのですが、だれも手を付けません。まあこれが現代にも続く日本とペルシア（イラン）の関係のようです。

## 福島安正のペルシア旅行

わが国では、福島安正という人について案外知られています。ただ最近はどうか知りませんが。彼は軍人でしたが、丁度日清戦争が始まる直前の明治 35 年（1892 年）に、当時滞在中のベルリンからロシアに入り、シベリアを横断しました。世間では一般に「シベリア単騎遠征」として、知られていました。彼の旅の目的を別に論じられたことは無かったようですが、冒険とはいっても、その大きな目的はシベリアという広大な土地が、一体どんな所なのか実際に見てみようというのが主な目的で、まあはっきり言ってしまうと軍事的な情報収集でした。ただ彼は、初め途中から南に折れて、新疆省の最西北部の端にあるイリに行く予定だったようです。何故イリなんて、と思う人がいるでしょう。実はここでイリ事件というものが起り、回族（イスラム教徒）の暴動で中国人の大虐殺があった所で、福島もこの現場を見てみたかったのでしょう。ただ何故か彼はこの旅は中止したようです。別に中止させられた訳ではなかったようですが、この虐殺事件があつてからかれこれ 130 年以上経ったのに、私はこの虐殺事件の起

こった中心の町、旧惠遠城の立ち入りを禁じられてしまった。まあ南京大虐殺と比較されるのが厭だったからでしょう。この当時は本といってもせいぜい小冊子か、本版か石版刷りのパンフといったもので、この単騎遠征の報告書は、私の蒐めたものもこのようなものでした。

この福島安正が、シベリア単騎遠征より早い明治 19 年（1886 年）の 4 月、参謀本部から派遣されてインドに向かいました。これは彼の単独の旅ではなく、内田三吉工兵中尉との共同の旅で、シンガポール、ラングーン経由でカルカッタに行き、このあと実に丹念にインド各地をめぐり、インドの東から西へ進み、ペシャワール、更にセイロン島にまで行きました。どうやらこのときチベット潜入を計画したようですが、これは失敗したようで、たしか彼がだめだったのだからチベットに入るのは無理だと、河口慧海も観念したと、確か言っていたようです。この時の旅行記が「印度紀行」（明治 19 年刊）で、せいぜい 230 ページほどの冊子ですが、結構貴重なものと言えるでしょう。

福島安正は、明治 28 年（1895 年）8 月、再び 3 度目の海外遠征に、今回は単独で出かけます。この時はインドからロシア、トルキスタン、更にペルシアを抜け、中東からエジプトまで足を延ばす、2 年に亘る旅をしました。ただ惜しいことに、この時の正式の報告書はありません。私も彼のことを 1960 年代からずっと追いかけていましたら、当時、参謀本部から数ページ足らずのパンフを、次々と印刷して出してはいたらしいです。ところが詳しいことが分かりませんが、この報告は 1 冊に纏めて本にして出版はされなかったらしいのです。このパンフの 1、2 種を持っていた旧軍人だった人がいて教えてくれましたが、他のものは見たことがないとのことでした。この原本は参謀本部には保存されていたでしょうが、多分、太平洋戦争が終って日本が敗北したとき、燃やされてしまったのでしょう。

幸いなことに、この現在原本の見つかっていないアジアの旅行報告が、1 冊の本に纏められて昭和 18 年（1943 年）に、「中央アジアよりアラビアへ」と題して出版されているので、原文ではありませんが、旅行の内容は知ることが出来ます。ただ内容の微妙な部分は、多分カットされているだろうと思います。大して問題はないと思います。これは 20 年以上昔、現代文に訳して出版したことがあります。評判はさっぱりでした。戦後の反戦の影響で、軍人の書いたものは全て悪いということでした。然もペルシアなど、日本人にはまるっきり関心が無かったようでした。当時は未だソヴィエト政権も崩壊しておらず、日本人にはイランもイラクもまるで知らない世界のようなようでした。

わが国は平和が続いたためか、世界情勢については関心も反応も遅く、何を言っても決まって反対をします。平和ボケ、平和バカと言われる所以でしょう。確か 3、4 年前、アフガンなんかから早く撤退しないのは間違いだと、ある新聞のコラムに書きましたら、アメリカはすぐ反応して撤退宣言を出したのですが、反対する人もいてとうとう今まで延びてしまったようです。アメリカは情勢収集が活発ですが、わが国はもう何を言っても全然通じないようです。

ブッシュ大統領がイラクを攻撃しようとしたとき、その行動が正しいかどうかという、全米マスコミの代表 200 人以上集った討論集会が、ワシントンでありました。この時出て来ないかと招かれたので、出かけて行ったことがあります。ただ何故か日本のマスコミ関係者は招かれなかったようで、いませんでした。中東での戦争はすべきでないという意見が圧倒的だったようです。正に激論でした。ただ結局のところ戦争はごり押しでやってしまったけれど、結果はどう見ても良くなかったようですね。今これがシリアに移ったようですが、どうやらアメリカは民主党に替り慎重なようですね。

暗く堅苦しい話で、きつとうんざりされたことでしょう。申し訳ありません。私が未だ若かった 1960 年代、福島安正という人について調べていましたら、まだ息子さんが生存されていました。既に 80 台でした。いろいろな話の末、自分は 3 番目の息子で軍人だったけど、上の 2 人の兄弟はみな日露戦争で戦死してしまい、結局、自分が跡取りになってしまったということでした。父親は、自分には殆ど話をしてくれず、何も喋らなかつたそうです。そこで逆に、私があちこちで聞いた父親の話題を話してあげました。

そんな中に、福島安正という人は、人一倍危険の多い場所を旅していたのに、不思議なことには全然怪我もせず、擦り傷一つ負ったことが無いといえます。そこで話してくれた人に何故なのだろうと問うてみたところ、その老人は私の質問にこう答えてくれました。彼は勇敢であったが、実に注意深い人だったのだということでした。またこんなエピソードを語って聞かせてくれました。「福島さんは軍人だけど、旅先でも現地の女性を丁寧に大切にしたのです。決して威張ったりせず、実に丁寧に扱った人でした」と。これは一見簡単そうに見えますが、実際は大変むずかしいです。下心があつたら絶対にだめなのです。こんな話を聞いてから、私も海外の旅をしたときこの教えを忠実に守ったところ、大きな事件が起こったことはありませんでした。

こんな笑い話も聞きました。いまいうシナ新疆省を旅した日野強という軍人がいますが、彼も福島と同じようだったと、日野強の息子さんから聞いたことがあります。父親は日露戦争当時、朝鮮人に変装し、現地の女性からいろいろ情報を集めてもらっていて、大変女性たちを大切にしていたとのこと。ところがこのことが家でバレて、奥さんからひどく叱られたとのこと。で、こちらもならどうしたら良いのですかと訊ねたところ、余計なことは一切喋らないことだということでした。

### マルコ・ポーロはどこを辿ったか

ペルシアになると話題がどうしても限られてしまって、良い話題がありません。しかも宗教がイスラム教なので、話がうまく進みません。わが国ではやはり一番分かり易いのは、マルコ・ポーロかもしれません。といって彼は今からもう 750 年もの昔に、ペルシアを旅して遙か東方へ行った人ですが、日本人なら誰でも知っているでしょうから。

マルコ・ポーロの旅行記は、日本では「東方見聞録」として、一般に普及されており、まあ大体は子供向けの本として知られているでしょう。しかし、西欧ではただ「マルコ・ポーロの旅」として知られ、歴史的な書物として読まれているようです。ただしこの本はマルコ・ポーロの自筆の本ではなく、捕われていたとき人に話したという聞き書きが、やがて記録として広まったようで、この見聞録にはいろいろな版があります。ですから、うっかりするとかなり杜撰なテキストもあり、ただ読んで楽しむなら良いものの、記録資料として使うとなると、利用するテキストは厳密に選ぶ必要があるかもしれません。まあ一般に良いものと言われているテキストは、ヘンリー・ユールの編纂になる本（全 2 巻）と言われていますが、何故かこの本は大冊のせいかわが国で翻訳されていません。

わが国では、何故か昔からマルコ・ポーロの本はホラ話集として知られているようです。本当ではない作り話の世界と、信じられていたのでしょう。ですから、まともな話として引用されることも、まずありません。良いテキストが読まれていないからでしょう。では世界はどこでもそうかという、そうではありません。マルコ・ポーロの語ることを真実として、これを追及してアジアを旅した人も少なくありません。さて、日本ではどうでしょうか。私はあまりまともな話を聞いたことがありません。

マルコ・ポーロは商人だった父親と叔父と 3 人で、イタリアから地中海を抜け、ペルシアにやって来ました。マルコ・ポーロが未だやっと 16、17 歳の頃の 1272 年のことといえます。彼ら一行は、ペルシア湾を抜け、ホルムズという港町に上陸し、ここから北へとペルシアの高原と沙漠地帯へと旅を始めます。そしてケルマン、コビナンという町を通り、いよいよ荒れた沙漠地帯へと入って行きます。ここが有名なカビール沙漠で、今では横断道路が出来ているようですが、私は通ったことはありません。ずっと西と東側の端から、この荒れた地域を眺めたことがあります。何故か背筋がぞっとしたことを覚えています。

一行がペルシア湾岸のホルムズに上陸し、ここからケルマン、コビナンという町を経由して北上して行きます。この辺りのペルシアの町は沙漠の中にポツンポツンとあって、あとは見渡す限りの原野です。この彼らの辿ったルートを追っていくと、マルコの描いた情景描写が浮かんできます。

今からもう700年も昔のことですから、自然環境が現在と同じだとはとても信じられないでしょうが、ただこの沙漠の中に点在する町や村は、そう大きく変化していないようです。オアシスを支える泉には限度がありますから。その為マルコ・ポーロが記述した当時の光景が、今もありありと浮かんでくるのです。ただ町が連続して繋がっている訳でなく、沙漠の中を点々と続いているものですから、これを追っていくのはそう簡単ではありませんが、興味深いことでしょう。しかし、何より驚かされることは、未だ16、17歳だった少年マルコが、メモして記録していった記述が、実に克明なことなのです。

ただこの沙漠地帯の中央部から北辺は、流砂以外樹木1本ない荒地なので、こんな土地を旅する旅行者も滅多におらず、その為具体的な記録が無かったのも無理なかつたでしょうし、飲み水といってもせいぜい塩分を含んだ、苦い水だったでしょう。私はここに入りたいと思いつながら、その願いは叶わず、遙か彼方に続く沙漠地帯を遠望し、もし旅するとなると大変だろうなと思ひ出します。何故かタクラマカン沙漠よりずっと陰気に感じました。

幸いマルコ・ポーロの本を編集したヘンリー・ユールは、この部分も丁寧に、省略せずに資料として活字にしておいてくれたので、今でも大変貴重なものになりました。

ここではごく簡単にざっとしか触れられませんが、このマルコ・ポーロが苦勞して辿ったルートを、彼のメモから起して辿ってみようという試みが、かつて幾人かの旅行者によって為されたことがあります。この中でとりわけ価値あるものは、ペルシアの探検調査に人生を賭けたと思える、英国の軍人サー・パーシー・サイクスと、中央アジア探検家のスヴェン・ヘディンの旅行記録です。彼らは20世紀の初頭ですが、各々マルコ・ポーロの記した町を探り、彼の辿ったルートを追及したことでした。

これは一見物好きな、何でもないように見えますが、実に興味深いものです。今から6~700年も昔の旅行者の足どりを追うことは、また別のロマンがあります。勿論、自然環境も変わっているでしょうが、現在と比較研究ができる筈です。ここでは細かい比較が出来ませんが、ユール、サイクス、ヘディン達の各々異なった見解を、今度は自分の旅の観察と比べてみたらきっと面白いと思ひますし、意義あることではないでしょうか。

## マルコ・ポーロと暗殺者教団

マルコ・ポーロのペルシア旅行の記述の中で、とりわけ興味を引くのは、この沙漠を横断して北に向かう途中、“ブドウ酒や牛乳、蜂蜜の川が流れ、その宮殿に絶世の美女を集め、暗殺者を養成していた”という「山の老人」の話を紹介していることです。ここは樂園だったというのです。アメリカがかってアフガン戦争を始めるまでは、暗殺を行なう宗派のイスラムの過激派のことなど作り話か、せいぜい遠い別世界の事のように思われていました。しかし、今ではこういった暗殺者教団のことを疑う人は、どうやらいなくなったようです。

マルコ・ポーロは暗殺者教団のことについて、実に分かり易く説明していますが、初めて知った人は殆ど空想の世界のこととして、信じなかつたでしょう。この教団については、今ではいろいろと研究されていて、このことだけを追求するものなかなか大変なことです。そこでここではごくざっと紹介してみることにしましょう。

「アサシン」というのは、イスラム教シーア派の中の一つ、イスマーイル派に対して用いられているもので、このアサシンという語の起源は、どうやらアラビア語のハーシシに由来するらしいとのこと。このハーシシとは、本来は牧草のことを指したらしいですが、後にこれはインド大麻を指して呼ばれたようで、この薬草の持つ麻薬効果が既に中世イスラム社会で、よく知られていたといひます。この麻薬効果を巧みに樂園伝説に利用したのが、「山の老人」で、この薬を飲ませて狂信者に仕立て、暗殺者にしたのだと、マルコ・ポーロは説明しています。

現在の北イランの東にやや寄った中央部に、どしんと大きく位置を占めるのが、既に触れたケビール

沙漠です。この辺りは塩沙漠です。こんな所は余程の物好きか無謀な旅行家でもない限り旅などしませんから、殆ど世間では知られていません。かつてアメリカ軍がテヘランで捕っているアメリカ大使館員を救出しようとした際、安全だと思って航空機を着陸させたところ、失敗してしまったことがあります。これなどアメリカ側はケビール沙漠のことについて、さっぱり知らなかった為でしょう。

私はマルコ・ポーロの旅行記と、サイクスやヘディンの本を読んでいて、暗殺者教団に関するテキストも幾つか集めていましたから、いつかここに行ってみたいと儂い夢を抱いていました。しかし、夢など遠い幻のようなもの、ただ 1970 年代、ソ連軍がアフガンに侵入して来る直前、アフガニスタンをぐるりと巡る機会がありました。このとき北西アフガニスタンのヘラートに行ったことがありますが、この時すぐ西隣のイランとの国境地帯を、南からずっと見る機会がありました。一面が荒れた沙漠地帯でした。

このとき西に続くイランの国境地帯の沙漠の中に、電柱のような細い岩峰が沢山そそり立っている所がありました。中には高さ 10 階建てぐらいのビルのようなものもありました。岩の柱で、殆ど垂直ですから、とても下から登れっこありません。この光景を見た瞬間、ふと思い出したのが昔読んだことのある、マルコ・ポーロの「山の老人」の話でした。彼の言っていることは嘘ではないな、と思いました。

山の老人はこういった岩峰の頂上部に、楽園としての庭園を造り、絶世の美女を住まわせていたに違いありません。この時受けた一番のショックは、マルコ・ポーロの書いたものには嘘が入っていないということ、この世界には我々に想像も出来ないものがあるんだなということでした。これよりずっと後のことですが、マルコ・ポーロは実際にシナには旅していない、だから茶について触れていないと指摘した英国人がいます。しかし、当時、西欧では植物の木の葉など食べませんでしたから、こんなことを紹介したら、たちまち嘘つきの烙印を押されてしまったでしょう。

日本人はクソ真面目というのか、信じられない真実を追求しようという気がないようです。ですからマルコ・ポーロもアラビアン・ナイトも、子供向きの作り話と信じている人が今も多いようです。こうなると真実の追求も、本当の夢を追うことも不可能になりますね。

マルコ・ポーロは 1273 年、ペルシアを北に向かいましたが、このエルブルース山脈中に、イスマーイル派の城砦、アラムート城がありました。ここは彼の旅の僅か 2~3 年前の 1270 年に、モンゴル軍によって攻撃され廃墟にされたのでした。この近くを通ったマルコ・ポーロはこの激しい戦いを、きっと聞いていたに違いありません。

昔、旅行者というのは嘘つきだと、よく言われていたのを聞いたことがあります。しかし、私は真実ということは何時かきっと分かるものだと、マルコ・ポーロから学んだことでした。彼はやがてペルシアの北端に達し、ここからルートを経由して、メシュドに行きます。この北はトルクメニスタン、南はアフガニスタンで、このルートはかつてのシルク・ロードです。このメシュドのちょっと手前にニシャプールという町があります。ここはトルコ石の原産地ですが、いま一つ有名なのは 12 世紀のペルシアの詩人オマル・ハイヤームの生地だったところです。この辺りの村や町を訪ねますと、古い頃のシルクロードの雰囲気が残っているようです。何しろこのすぐ北側はカスピ海ですから、陸のルートは無いのです。

## ルバイヤートの世界 —— チューリップとケシの花

シルクロードという世界は、戦後といっても特に日本では、1960 年代から 70 年代にかけて大変流行しました。そして何でもかんでもシルクロードという言葉が、大いに氾濫しました。しかし、シルクロードの本来の意味はローマからずっと東方に続いたものでしたが、日本では大体が中国領の中央アジア、西域が主で、それから先の西方の所にはなかなか入りません。せいぜい行ってもサマルカンドかブハラ辺りまでで、それから西のカスピ海からペルシアの方には、さっぱり別世界といった所でした。日本の

場合、東洋史が主になると中東の世界は中々現われません。

マルコ・ポーロが東洋に旅したルートを追って行きますと、ペルシアからトルキスタンを経て来ますが、ここが本来のシルクロードになります。またペルシアの詩人オマル・ハイヤームの世界になります。時代をもっと先に延長すればアレクサンダー大王の辿ったルートと重なりますし、更に様々な旅行者が雲霞と登場してきます。いずれも興味深いのですが、とても触れていただけません。私には無理でしょうからここからごく限られたものだけに、触れてみたいと思います。

オマル・ハイヤームという人は、今では専らペルシアの詩人ということで、世界的著名人ではありますが、何故かシルクロードには一切顔を出しません。彼は元々が数学者であり、数学者として有名でした。その彼の「ルバイヤート」という四行詩を詠んだ作品が、19世紀に英国で英訳されたことで、俄かに一世を風靡するほどになりました。そこで今では「ルバイヤート病」と呼ばれるほどの愛読者が世界におり、日本でも相当な愛読者というよりかどちらかと言えば、重病人もいるようです。

彼は自作の詩を世間に知らせる気もなく、あくまで自分の作品を自分で保持していたらしいですが、やはりいつか世間にも知られ愛読者もいたようです。こんなことで彼は世間に迎合する訳でなく、自分の信念を詩に託していたようです。そこが時代を超えた共感者がいる理由なのでしょう。この時代のペルシアでは、詩だけ作っては生活は出来なかったのも、国王を讃美し、宮中に伺候していたのが多かったといえます。

このオマル・ハイヤームは、先程触れたニシャプールに生まれた人ですが、彼の若い頃の学友にハッサン・イ・カッパーハという人物がいたことが、知られています。実はこの彼が、マルコ・ポーロの旅行記の中で紹介された山の老人と関わりがあったというのですから、驚きです。実はこのハッサンの後継者アラール・ウッデン・マホメッドが、山の老人だったというのですから。

これは当時語られていた一種の伝承で、事実だったかどうか確認出来ないようですが、世間と言うのは実に狭いものだと思うしかありません。ただハイヤームは、暗殺者教団とは何の関わりもなかったようですが。

ペルシア人のことやペルシアの様々な風俗習慣を知るには、ペルシアの詩をよく読むことが、一番理解を早めてくれると言われていています。例えば、このハイヤームの「ルバイヤート」を見ますと、彼の詩の中によく酒（ワイン）と美女と花（チューリップ）が使われています。シルクロードの本の中には、こんなテーマはまず出てきません。

ではこんなものなんでもないと思われるでしょうが、オマル・ハイヤームの生まれ故郷のニシャプールという町から、すぐ北に向かうとざっと 150km ほどで、イランとトルクメニスタンの国境になります。この国境線と並行してコペット・ターグ山脈が続いています。樹木などまるっきり無い空坊主の山ですが、せいぜい高度 1000 メートル程です。ところがこの山裾の草地には、3月の彼岸の頃になると、一斉に咲き始めます。野生のチューリップです。彼の詩の中に、「さあ酒姫（カーキイ）よ起きたまえ、もう夜が明けたよ、水晶の酒杯に紅（くれない）の酒を注ぐのだ・・・」とあり、また「酒を飲むなら、思慮ある人と、それともチューリップのような美女と飲め・・・」とあります。

この中に、「水晶の酒杯」、「紅の酒」とありますが、この「水晶の酒杯」というのが既に前に触れた、ガラス製の容器です。そして「紅の酒」とありますが、これが葡萄酒（ワイン）なのです。19世紀にペルシアを訪れた旅行者は、彼らは昼間からワインを飲んで酔っ払っていたといえます。そして、「チューリップのような美女」とありますが、チューリップは野生の花として咲いていました。ワイン・カップはこのチューリップをかたどったものです。

ペルシアからずっと続くシルクロードは、かつてアレクサンダー大王の東征軍が進撃して来た所です。そしてどうやらニシャプールを抜け、メシドから北に折れ、コペット・ターグ山脈を越えてトルクメニスタンに入って来たのです。丁度この国境線を北に越したところに、カアハカという小さな町があり



ます。私もかつて2回ばかりこの町を抜けたことがあります。ただ言われなければ、知らずに通り抜けてしまうような平凡な田舎町ですが、兎も角おかしな名です。「カ・ア・ハ・カ」なんて、どういうことなんだ、と。

ところが紀元前4世紀、マケドニアのアレクサンダー大王は、ペルシアを滅ぼしてから北上し、どうやらこの辺りから中央アジアに侵入したようです。この時の彼の軍勢は2000人足らずだったといいますが、既に長途の遠征ですっかり疲労していたといえます。ですからこの小さな部落を通るときには、既に気力も大半尽きていたことでしょう。しかし、村の住民は、他国民の侵入から村を防備しなくてはなりません。しかし、軍勢などいない。そこで住民の中からの発想だったのでしょうか、大きなガラス板を出して、キラキラと太陽の光で反射させて、ギリシャ軍を驚かせてやろうとしたといえます。

しかし、肝心のガラス板が歪んでいたため光が相手に向かって反射しなかったので、折角の発想なのに敵軍を驚かすことが出来ませんでした。一方のギリシャ軍はこんな小細工など問題もせず、アツハツと大声を出して笑って行ってしまったのです。全くの予想外れだった訳です。ところが面白いことは、これが地名として今に伝わるカアハカの由来だということです。これをもう何十年も昔にトルクメンで知って、すっかり楽しんだものでした。ですから今でもワインをワイン・カップに注いで飲む時、決まって思い出します。ワイン・カップの底に飲み残しのワインが溜っているとき、ここに美女が横になって眠っているのだよと、ペルシアの誰かから教わったことを、同じく思い出します。

3月が去ると、あつという間に4月に入ります。するとこの草原は、今度は赤い花が一面に咲きます。これはまさに天然の絨毯を敷き詰めたようで、これはトルクメン絨毯と色彩がそっくりです。この花は丈が低いですが、既に前に触れたケシの花です。これから麻薬が作れるかどうか確かめませんでした、ここにも暗殺者教団の世界を偲ばせてくれます。

## マルコ・ポーロと宝石の世界

我々はよく取り違えてしまうのですが、マルコ・ポーロは研究者でも、歴史家でもありませんでした。では自分では何と思っていたのでしょうか。彼はごく普通の庶民であり、商人だと思っていたのではないかと思います。我々は良い意味で旅行家と呼ぶべきでしょう。その彼がふと漏らした言葉の中に、大変興味深く、参考になるものがあるように、私は思うことがあります。その彼が、このアジアの旅で一つの貴重な教訓を受けたといえます。それは「同じ道を2度と歩かない」というのです。これは私も大いに学んだものでした。それは言うほど簡単なものでありませんが。

まあ本来からすれば、調査するときは幾度も体験することが必要です。しかし彼は、自分の体験からこう信じたようです。「世界は本当に広い。同じ所をうろうろするのは、決して賢明ではない」と。そして、結論として「人生はそう長いものではないのだ」。どうもこの教訓を学んだのは、探検家のスヴェン・ヘディンだったようです。同じ場所には出かけません。

まあここまでは彼の哲学だったようです。この他に、どうやら人に語れない、出来たら聞かせたくないという、心の掟というものがどうやらあったようです。「価値の無いような所には行かない。美女と宝石のある洞を選んで通ること」。まあこんなことを言えば、品の無い言葉尻としてとる人がきつといることでしょう。だから人には聞かせたくないのです。要するに汚らしい所、またいやらしい物は見ないようにすることです。だから美しい価値のある宝石の産出するような所を訪れよというのです。

結局、彼は帰国するときには、アジアの宝石の産地を次々と訪れ、どうやら沢山の貴重な宝石を故国に持ち帰ったようです。彼が巨万の富を有したというのは、こういった教訓を現実に実践したからでしょう。

マルコは、父や叔父が商売のためサマルカンドなどに出かけている間、約1年ほどトルキスタンの南辺に当る、北アフガニスタンのバグフシャン地方に一人で滞在していました。当然、付添人はいたでし

よう。何しろまだ 10 代の頃のことです。ところがこのバダフシャンという所は、宝石の原産地だったところ。戦前、日本人でこの地方に入ったということは聞いたことがありません。1970 年代に、この地方を旅した時には噂話は聞いたこともありません。何しろ大変な僻地でした。

ここから紅玉髓が産出しました。一般にバダフシ・ルビーといい、一見したところ実物のルビーと区別出来ぬくらい綺麗で、紅い色合いを見た限り、ルビー以上に見えます。勿論、私などの素人には区別が出来ません。そしてこれにはまた緑色した紅玉髓というの也有ります。これはそう産出しないうらしく、私はトルクメニスタンのアシュハバードの市場で見かけたことがあります。概して日本人は宝石が産出しないうので識別が弱く、区別ができないようです。

このバダフシャン地方には、色のずっと濃い青色をしたラピズ、ラズリが産出します。ここの立ち入りは大変むずかしく、私も見たことがありませんが、ここからずっと西方のニシャプールはやはり青色のトルコ石の原産地であり、なにか不思議な世界です。そこがまたチューリップやケシの花が咲くのですから。

このバダフシャンからやや東に行ったところに、謎に満ちたワハンの回廊という所があります。ここはアフガニスタン領で、その北がパミール高原で細長い溪谷になっています。かつてこのルートは 7 世紀には玄奘三蔵も通りましたし、マルコ・ポーロもここを東に抜けて、今の新疆のホータン地方に行きました。ホータン地方はご存知のように玉の産地で、マルコ・ポーロも十分知っていました。

ホータンの玉は、この南に当るチベットの崑崙山脈から流れ出す川水に運ばれて来たもので、ホータンで産出するものではありません。ここでマルコ・ポーロの観察眼の凄うと思うのは、この崑崙山脈がずっと東に延長して、アルチン・ターグ山脈を越える所からも、玉が産出するのだと言っていたことです。これは誰も触れていませんでした。マルコの説が本当かどうかと思っていて、たまたま 2000 年に中国の研究者たちとチャルクリックを訪れたとき、驚いたことにごく最近、ここから玉が見つかったというのです。実際にこの玉は見る事が出来ました。

—了—

## 第Ⅱ部

### 新しい時代の夜明け

#### — ヴァーンベリー、ヘディン、サイクス兄妹、カーゾン卿 —

ペルシアといえはすぐに思い浮かぶのは、様々な詩人たち、フィルダウスイー、サアディー、ハーフィズといった人々、またアラビアン・ナイトの世界にも一部属します。なにしろ先程お話ししたマルコ・ポーロの父親たちが、商売のために立ち寄ったサマルカンドは、そこにある花園からアラビアン・ナイトの簡巻第 1 話が始まるくらいですから。ペルシアというのは現在の石油を除けば、日本との直接の関わりが中々見つからないのですが、実はわが国でも人気の高くなつた庭園も、ここで生まれたものです。ちょっと信じられないようすが、ペルシアの庭園様式は実は幾何学操作で作られ、実に見事な芸術的な世界です。ここに様々な植物が栽培されたのでした。今いうガーデニングの発祥の地でもありました。ですからここで観賞用の植物や、菜食用の野菜や果実の樹木が植えられ、次々と品種改良されたようです。ただし中東の文化はどちらかと言えはペルシアよりか、アラビアの文化に依存していたことも事実

ですが、こちらに触れ出すともうきりが無いので、いま一度ペルシアの世界に戻ることにしましょう。

古い時代のペルシアではなく、いま少し新しいペルシアの事情をどうしたら知ることが出来るかが、やはり問題になります。何から何までイスラム教の議論になってしまうと、我々にはもう手に負えないからです。

いま少し、19世紀から20世紀にかけてのペルシアのことを、どうやったら知ることが出来るか。まともに歴史や文化について触れ出すと、当然、宗教即ちイスラム教の世界に入るしかありません。しかし、この宗教問題になると、日本人にとってはやはり特殊な世界ですから、とても一朝一夕に理解できません。そこでまずイランという土地を旅し、そこに住む人々や自然環境、そして出来れば歴史的背景について見たり聞いたり、また説明してもらうことが、まず一番親しみ易いかと思います。まず風土順応することです。

ではそうしたことを分かり易く、楽しみにするにはどのような方法があるかという、ペルシアについて書かれた本をまず読んでみることでしょう。日本人では既に触れましたように、殆どいませんでしたので、調べていってみると幾人かの西欧人の書いたものがあります。旅行記や回想記です。研究書でなく、兎も角難しいものでないのが良いのです。そこでざっと見ていってみると、イスラムの巡礼者に変装してペルシアやトルキスタンを旅して回った、ハンガリー人のアルミニウス・ヴァーンベリー、探検家のスヴェン・ヘディン、それに英国の軍人サー・パーシィ・サイクス、と彼の妹のエラ・サイクス、そして浩瀚な「ペルシアとペルシア問題」(全2巻)を書いたカーゾン卿などを通して、見ていったらと思っています。ただ残念な事にわが国では、こうした本が殆ど翻訳されていません。それにただ旅行記とか見聞録だけでは、役立ってくれそうではありません。いま少し書かれた中から貴重な知的情報が知りたいものです。

ところが現在、イランとアメリカやEU諸国との間の関係が、どうもしっくりいっていないものから、わが国もそれに曳きずられた形で、さっぱりイランとの交流がうまくいっていないようで、国民も関心が薄いようです。確かに現代のイランは、もう冒険するような所ではありませんし、飽くまで歴史か芸術を楽しむところでしょう。政治絡みになると、とかく煩わしい問題が出てきますから。我々にとってイスラム教はやはり実際にはちょっと理解は無理ですから、これで問題が起ることはちょっと考えられません。イスラム教は大きくシーア派とスンニ派の二つに分かれていても、我々にはその区別も難しいでしょう。兎も角ペルシアは古い歴史を持った国ですから、政治絡みを抜きにするならば楽しみ方を習得すると、大変興味深いことが沢山増えてくれます。

現在のイランを旅する一つの方法は、繰り返すようですが、兎も角この国の芸術と文化を知ることだと思います。どんなつまらないようなことでも、是非知っておくことがコツだろうと思います。

例えば、既に触れましたようにガラス製品があります。テヘラン、その他の大きな町に行ったら是非博物館をご覧になることでしょう。また焼き物もあり、これは日本の茶器とは一味違った雰囲気があり、見落とさないことでしょう。

またあちこちの町に行きますと、決まってかつての王宮や寺院跡の大きな庭園があります。これもうっかりするとただの植物園かとはよく見なかったり、見落としてしまいかねないのですが、この庭園の歴史は古く、世界遺産にもなっています。ここからインドのイスラム庭園へと広がっていきました。これを追いかけるのも実は中々大変です。

これとはまた別に芸術となると見逃すことの出来ないのが、ペルシア絨毯です。私もあちこち絨毯工場は出来る限り見て歩きましたが、さすがペルシア絨毯の世界は大きく、私の知識などゴミ同様でした。絨毯には羊毛で織ったものと絹のものと2種類あります。また絨毯そのものも産地によって、よく区別されます。ポピュラーな作品としてよく知られているものに、新疆のホータン製のものがあり、これは古くからトルキスタン(ウズベキスタン)のサマルカンドに持っていき、サマルカンド絨毯として売ら

れていました。

サマルカンドのすぐ隣町に有名なブハラ町があります。かつてここに行くと濃い紅色をした絨毯が売られていました。私も以前よく見かけました。これはブハラ産と言われ、大変有名なものでした。誰も疑う人はいませんでした。ところが実はこの絨毯は、ブハラの西でアム・ダリア河を渡り、次いでカラ・クム沙漠を横断して、トルクメニスタンのアシュハバードなどで織られたものでした。私は旧ソヴィエト時代、その後の独立してトルクメニスタンになった時と幾度かこの絨毯工場を訪れましたが、すっかり一変してしまったのに驚いてしまいました。

1991年にソヴィエト政権が崩壊するまでは、広い絨毯工場を自由に見学させてくれましたし、織り工の女の子達も本当に親し気でした。しかし、年が経つにつれ、トルクメン絨毯は許可なく持ち出しが禁止され、更に工場の見学も出来なくなりました。理由はよく分かりませんが、トルクメンのカラ・クム沙漠から天然ガスが産出されることになり、絨毯輸出に頼らなくてもよくなり、保護する方針に変更したらしいのです。確かにトルクメン絨毯（ブハラ絨毯）は優れた産物ですが、ブハラ絨毯という歴史的背景があったから評価されたのであり、そうでなかったら如何に優れていてもただ織物に過ぎないでしょう。

国境をちょっと一跨ぎしただけで、もうペルシアなのですが、明らかにデザイン、色模様は違います。民族も違います。これが日本人には中々理解できないところです。

現在のイランに行かれたなら、是非このペルシア絨毯の工場も見学することをお薦めします。兎も角こうした作品は日本では中々見ることが出来ませんし、日本人の世界とはまるで違ったもので、書かれた書物からでは分からない世界です。現地で聞いたところ、畳1~2枚の大きさのものを織るのに2~3年かかるとのことでした。

## ヴァーンベリーの旅

旅好きの人は、何故か車好きの人が多くようです。これは当然かもしれません。これから出かける先の情報を知らなければ、幼稚園の遠足と同じですから。ただこの車好きの中でもこれが高じてくる人に、どうも山好きの人が多かったようです。ただこの人達も段々と年をとり、私の周囲でも亡くなる人が多くなり、家では邪魔になって放出されるので、この山の本が古本屋で山積みされているのをよく見かけました。

話はそれますが、一方シルクロードがブームになると、今度は中央アジア方面の関心が大きくなり、こちらの本も広く出まわり始めたようでした。本来なら当然、ペルシアも入っていて良かったと思いますが、ペルシアは少々遠かったためか、余り関心が及ばなかったようです。然も、山はカスピ海南岸のコーカサス山脈ぐらいですから、どうしても魅力不足になります。しかし、もう幾度も触れました通り、ペルシアは冒険行の領域では無く、巡礼路と言った方が適切かもしれません。となるとイスラム教徒でない我々は、ペルシアの芸術文化と歴史を知っていないと、まるっきり犬と同じになりかねません。そこで出来たらこの風土によく通じた人の紀行文を読むのが、一番でしょう。大体周囲にあるのは旅のガイド・ブックぐらいで、これでは思想がありません。出来る限り良い本を見つけて、これを聖書のように持って歩くのが良いと思うのですが。

私は残念ながら詳しいことがさっぱり分からないのですが、私にとって一番参考になったのは、ハンガリー人のアルミニウス・ヴァーンベリーという人の書いた、ペルシアと中央アジアの旅行記でした。幸いこの旅行記は日本語にも翻訳されていますが、これも戦後のことで戦前の日本人でこれを参考にしたという人は、私は知りません。英訳されていました。

ヴァーンベリーはユダヤ系の出自だったので、大変苦勞したようです。彼はハンガリーで生まれ、後にトルコに渡り、そこでトルコ語やペルシア語を学んだといっています。トルキスタン、即ち中央アジアは

トルコ系の民族です。彼はコンスタンチノーブルから 1863 年、ペルシア巡礼の旅を始め、まず黒海を渡り、コーカサス地方を抜け、テヘランに入ると次いで南へとクム、イスファーハン、イエズドを経由して南端に近いシラズに行きました。彼の旅からざっと 150 年も経って、彼の辿った巡礼路を訪ねましたが、町と町との間の情景は当時とそう変っていないのではないかなと、思ったものでした。彼の旅行記を読んでいなかったら、ただの旅だったことでしょう。そういった印象は旅から戻ってしばらく経つと、何となく重なってくるものです。これに比べると日本の変化は余りにも大きいです。

ただヴァーンベリーの旅行は、実はペルシアよりか、むしろこの後に続くトルキスタンの旅ではないでしょうか。当時は国境線などあって無きが如しで、ペルシアもトルキスタンも殆ど同じ世界と違ってよろしいのではないのでしょうか。彼はもと来た道を逆に辿ってテヘランに来ると、今度はここから北のエルブルース山脈を越えて、トルクメンに入ります。そして、ここからいよいよカラ・クム沙漠を北東へと大きく横断して、アム・ダリア河畔にあるヒワに行きました。

特にこの辺りのカラ・クム沙漠は未知の秘境と言える所で、全てが砂原ではなく、乾燥植物も生え全く魅力たっぷりの自然です。ただ水が無いので旅が難しいのです。ヴァーンベリーの旅した頃のヒワは、ヒワ汗国の都でした。ヒワはヒヴァと呼ばれることもあります。今は遺跡として保存され、人々の定住地ではありませんが、大変魅力溢れた所です。ここもヴァーンベリーの旅行記を読んでいないと、ただ過去の遺跡に過ぎず、ここで演じられた過去の出来事は知ることも難しいです。このヒワについて詳しく触れるのは難しいですが、当時のヒワの汗はセイド・ムハマント・ハンといい、大変残酷な人物だったようで、人を殺すことなどまるで虫を殺すようだったといえます。またペルシア人を奴隷として捕えて来て、ヒワには 3 万人もいたといえます。

このヒワからヴァーンベリーは、また巡礼団の一行に加わって、今度は東南にあたるブハラ、サマルカンドに向います。今では沙漠の中に出来た道路を車で走ってしまうので、印象がまるっきりありませんが、ヴァーンベリーの頃は大変でした。一杯の水も手に入らないため、親子でも水を与えなかったといえます。とても信じられないものでした。これは現実には今も変わらず、1990 年代のことですが、これはタリム盆地のタクラマカン沙漠を中国の研究者と横断した時、水が不足してしまい、死ぬ思いでした。この時思い出したのはかつて読んだヴァーンベリーの体験でした。水の豊富な日本人には、とても想像出来ない世界です。

ヴァーンベリーという人は語学の天才と言われた人でした。旅にとって重要なのは、確かに言葉でしょう。これもヴァーンベリーのことから学んだことでした。兎も角彼はようやくブハラに着いて、様々な人種の展示会場のような感じだったと思ったと言っていますが、これは現在でも変わりません。ブハラでヴァーンベリーは一つの幸運に恵まれたようです。ここには現在も溜池の周囲に茶室があるのですが、ここに本屋があったのです。ヴァーンベリーはブハラの市中に、26 軒もの本屋があったと言いますが、市民の中にこれほど文字の読める人がいたというのは、驚きです。

ヴァーンベリーがこの本を漁っていくと、素晴らしい稀覯本があったようで、ペルシア語で書かれた 2 冊の写本を、乏しい持ち金で購入したと言っています。この本屋さんというのも、多分、古書店だったのでしょうか。彼はこの写本を大切に持ち帰ったのですが、これが 1873 年、彼の旅から 10 年目に、「ボハラ史」(History of Bokhara, London 1873) に編訳して、英訳されて出版されました。私がブハラに行った時、このことを覚えていたので本屋を探したのですが、見つかりませんでした。まああっても屋台店ぐらいのものでした。

まあこの古い記憶があったので古本を集めた書棚を眺めたり、売店の親父に尋ねたりすると、すっかり汚れたり破れた冊子を持ってきてくれたりしましたが、この中にペルシア語やトルコ語版の「ルバイヤート」が、結構ありました。勿論、古いものではありませんが。

現在、ヴァーンベリーから何か学ぶものがあるのかというと、私には民族問題ではないかと思いまし

た。偶々私が幾度目かにブハラに行った時、丁度ソヴィエト政権が消滅した直後の時で、町にいた小中学生ぐらいの少年に、町を案内してくれないかと尋ねてみると、実に熱心に助けてくれました。そしてその後、自分達の一族の集会所まで案内してくれ、様々な歓迎をしてくれました。一種の祭壇があり、私にも見当がつかかねて尋ねたところ、自分達はユダヤ系の民族で、今日はその祭礼日なのだということでした。これは本当に他で体験できないものでした。こんな複雑な民族構成についての知識も、ヴァーンベリーから学んだものでした。もしヴァーンベリーの本との出会いが無かったら、ただ単なるツアーだったでしょう。

## ペルシアの過去と現在（1）

ペルシア——現在のイランという国は、我々日本人にとって分かったようで、実はよく分からないことの多い、遙かな国のような気がします。これも既に繰り返し触れてきた通りです。そこで興味深そうな話題を拾っていくのが一番簡便な方法かもしれませんが、しかし、それもとても難しいことです。

ところが実際問題になるとすっかり困り果て、どうしようかと散々考えてもよい方法がなく、なら比較的知られているヘディンの若い頃の話でもして、お茶でも濁そうかとも思ったのですが、折角の機会でもありますので、ちょっと触れても良いかもしれません。ヘディンは20歳早々でペルシアを訪れ、その後ペルシアを再訪し、ペルシア皇帝から勧められてデマベンド山の登頂をします。そして帰国後、この時の報告書を書いてドイツで学位をもらいます。ところが驚いたことについて最近、アメリカの政府の関係者が、ヘディンは学位（博士号）など持っておらず、嘘をついているとの報告書を書いているのを見て、仰天しました。アメリカの政府の情報もこんなにお粗末なのですから、とても現代の中東を巡るグレート・ゲームなど戦えっこありません。私はヘディンの署名の入ったこの学術論文を手に入れて持っています。

何処の国でもそうですが、その国の歴史的背景や実情を知るには、大雑把であってもその国の紀行や回想録など読むのが、一番良いようです。ペルシアの場合でもそうだと思います。唯一の欠点は、関心が無かったためかそういった本の紹介が殆ど無く、翻訳本もさっぱりありません。

私は偶々20歳代のごく初め、ヘディンの書いた自叙伝「探検家としての我が生涯」を見る機会がありました。この初めの章で、丁度20歳になって高校を卒業する時、校長先生からノーベル商会の技師長の息子の家庭教師となって、カスピ海西岸にあるバクーに行かないかと言われました。ヘディンは直ぐにこれを承諾して、この年の夏にロシア経由でバクーに出かけました。全く幸運だったと言えるでしょう。

このバクーという港町は、夜になると海岸の沙漠がパッと明るく火がつき、幻想的な所だったのです。これは石油と天然ガスのためでした。バクーは拝火教の発祥の地だったのです。これに目を付けたのが火薬の発明で資金を得たノーベル家で、ここで大規模な石油開発事業を行っていたのでした。ヘディンはここに半年ばかりいて、ここで獲得した資金で帰国する際、偶々読んでいたヴァーンベリーの旅行記から、ペルシアの旅をしたのでした。そして故国に戻る途中でハンガリーのブダペストに立ち寄り、ヴァーンベリーに会っていろいろ旅の話をしったり聞いたりしました。

ヴァーンベリーは親切にも、帰国したら旅行体験記を書くようにヘディンに勧め、更にスウェーデンの出版社に斡旋までしてくれました。こんなことは何でもないように思うでしょうが、本当に信じられないようなことでした。私の事を言うのはちょっと憚られますが、ヘディンの本を書いたとき、こんな本は2度と書くな、出版させるなど私と出版社に投書が届いたことがあります。ヘディンは幸福な人だったのでしょう。ただヴァーンベリーはユダヤ系の人だったため、生涯批判と妨害に遭ったといえます。

ヘディンはこの機会を契機として、スウェーデン国王からペルシア使節の通訳官に抜擢されてペルシアに再遊し、ペルシア皇帝とも会い、その帰途、今度はペルシアからパミール高原を越えて、シナ新疆省のカシュガールまで出かけました。この時の体験記が幾冊かありますが、省略しましょう。人には皆

運・不運が付きもので、全ての人がうまくいくものでありませんが、やはり努力と信念が必要ではないでしょうか。

これも既に前にマルコ・ポーロのところで触れましたが、英国の軍人サー・パーシィ・サイクス准将のペルシアの体験録は、どうしても除く訳にはいかないと思います。彼は生涯大変魅力的な本をかなり書きましたし、特に彼の妹のエラも兄と同行し、素敵な紀行本を書いています。これが「騎馬の横鞍に乗ってペルシア横断」(Through Persia on a Side-Saddle, London 1901)です。大変立派な本ですが、何故かこの本は私の知る限り、わが国で殆ど紹介されたということを知りません。そんなことで、ご存知の方も少ないのではないのでしょうか。

彼女は、兄が新しくペルシアの旅を始めるといので、一緒に行くのを勧めてくれたことから、ロンドンから黒海を渡り、更にカスピ海経由でテヘランに入りました。これは当時、ヨーロッパからペルシアに入る一番手頃なコースでした。既に触れたヴァーンベリーも、ヘディンもこれを利用しました。ただ旅行者が女性となると、例え英国人であってもいろいろ大変だったようです。特に回教圏になると尚更です。結局、彼女は 1894 年に旅を始め、バクー、テヘランを経由して南下し、イエズド、ケルマンから更に南へとバムプールに行き、アフガン南部のバルチスタンを北東へと進み、クエッタを北限として南に下り、インダス河沿いにカラチに出て、後はペルシア湾を遡ったものだった。

19 世紀末では、東部ペルシアの人跡稀なバルチスタン地方を旅した西欧の女性は、彼女が初めてだったという。ではわが国ではどうだったのか、現在では世界でも聞くことの稀な地方で生活している日本女性は少なくないようですが、戦前では殆どいなかったでしょう。女性の目を通して、いろいろな国の事情を知ることは重要だと思いますが、わが国では余り問題にされないようです。

ペルシアを旅した女性旅行家に触れた以上、やはりいま一人英国の女性フレヤ・スタークという人物を紹介すべきでしょう。彼女は東洋学を学んだようですが、若い時からペルシアを旅し、特にイスマイル派の暗殺者教団のハラムートに、1930 年に単独で出かけて行き、この廃墟跡を調査してきて、その体験記を書きました。それが「暗殺者教団の谷と他のペルシアの旅」(The Valley of the Assassin and other Persian travels, N.Y. 1934)です。大変興味深い紀行です。暗殺者教団については幾度も触れ、もう新しい情報はありますが、見る目が違るとまた印象も違って来るようです。

## ペルシアの過去と現在 (2)

出来ればペルシアの個々別々の人達による体験録も貴重ですが、これで全土をカバーすることは不可能ですから、どうしてもオチが出てしまいます。出来たらその概略であっても全体像が知りたくになります。手頃なガイド・ブックが現在一番利用されているでしょう。しかし、出来たらいまま少し学術的なテキストが、必要かもしれません。機械的な百科辞典ではなく、著者か編集者の感情も入ったものです。幸い 19 世紀末から 20 世紀にかけて、これを満足させてくれるような大冊の著作が出版されました。私の知る限りでは、英国の政治家であり、インド総督や外相にもなったジョージ・カーゾンの作品です。

カーズンは侯爵にまでなった位人臣を極めるといった人ですが、かなり沢山の著作を遺しています。ところが何故か余り紹介されないものに「ペルシアとペルシア問題」(Persia and The Persian Question, 2 vols. London 1892)と題した 2 冊本があります。何しろ両巻合わせると 1300 ページにもなる大冊です。何しろペルシア全域について詳細に触れており、各地域と都市とが図版入りで紹介されています。とてもこれだけの分量を、個人一人で書けたとは信じられないですが、実に詳しい説明がされています。ですから、本欣後 100 年以上経った今、でも十分に参考になります。図版や大判の地図も役に立ってきます。ですからペルシアの全体像を知るには、実に貴重な一冊となることでしょう。

ペルシアについての地理、歴史について知るには、いま一種のものを除く訳にはいかないでしょう。カーゾンの名著から 30 年ほど経って出版された、これも大著の「ペルシア史」(A History of Persia, 2 vols.

London 1921 ) で、2 巻合わせて 1600 ページほどあります。図版も大型地図も入っていますから、大変に参考になります。こういう本を見ていると、我々日本人は学問的にもすっかり遅れをとっていると、痛感させられます。では現在我々のレベルは上がっているのでしょうか。何か全く自信が得られません。

ペルシアについてあれこれ触れていると、何か末梢的なつまらぬ話題になりかねません。そろそろ結びにする必要があるのでしょうか。くだらぬ話だと一切断裁してしまうのも良い方法ですが、こうしたペルシアについて触れることも考えてみれば、滅多にない良い機会かもしれません。それにまた一般に余り知られていないものも、考えて見れば意外に多いような気がします。

例えば、1907 年に、中国の敦煌莫高窟から膨大な量の古文書を入手した、オーレル・スタインという人がいます。良く知られた西域探検家です。彼は元々がハンガリー出身のユダヤ系の人でした。丁度ヴァーンベリーと同じような人でした。ただ不思議なことに彼の書いたものの中で、ヴァーンベリーについて触れたものは、私は見た事がありません。ヘディンと好対照です。彼は 1904 年に英国籍を取ったので、以来ずっと英国人として扱われ、ヴァーンベリーのように不遇な扱いを受けず済みました。日本では専らスタインは西域の考古学者として評価され、イランや中東の探検調査の業績は、殆ど紹介も評価もされていないようです。

ところが彼の晩年は、殆ど中東の考古学調査に彼の人生最後を捧げていました。では何故こんな僻遠な土地に、わざわざフィールド・ワークを移したのかというと、これには理由がありました。スタインは、1928 年、永年勤めたインド考古局を退職すると、アメリカのハーバード大学フォグ博物館からの要請で、西域の調査を依頼されました。特に敦煌の古美術品の調査です。ところがこのことを嗅ぎつけた中国人のウィリアム・フンという人物が、一種のスパイとなってスタインの行動を監視し、結局スタインは、西域調査が時の中国政府から禁止され、中国から出て行くしかありませんでした。

スタインはどうとうこの中国側の陰謀に気付かなかったようですが、仕方なくスタインは研究調査のフィールドをイランに移すしかありませんでした。そこで調査した報告書が大変立派な「北西インドと南東イランにおける考古学予備調査」(Archaeological Recon-noissances in North-Western India and South-Eastern Iran, London 1937 ) と、いま一冊、「西イランの石道」(Old Routes of Western Iran, London 1940 ) として、出版されました。ただ 1939 年にはとうとう第 2 次大戦が勃発し、これまで立派な装丁だったスタインの本も、すっかり地味なものになりました。まあ文化面でも古いペルシアの時代は、終わったのでしょうか。

ただ何にでもオチが付くように、スタインの本にもこれがありました。スタインがアフガニスタンで亡くなってから、40 年以上経って、1985 年に「(ローマ) 帝国国境城壁報告」(Sir Aurel Stein's Limes Report, 2vols, Oxford 1985) という草稿が見つかり、出版されました。これは 1938~39 年に、スタインがイラクとトランスヨルダンで行なった調査報告だったのでした。

このようにあちこち穿り返してみても、日本人の記録がさっぱり姿を見せてくれません。ペルシアなどは特別だったと思いますが。私がずっと昔、蒐めてあった雑資料をあさってみましたら、ふと目につくものがありました。これは以前といっても明治大正期、ロシアで活動したジャーナリスト、大庭柯公(景秋)と言う人が書いた「南北 4 万哩」(明治 44 年) という本に気付きました。中を開けてみるともうすっかり忘れていた「波斯遊記」と「中央亜細亜遊記」の 2 章が入っていました。

ここで改めて触れる余話はありませんが、日本人の書いた記事としては、優れたものに違いありません。彼は当時のロシア通でありましたが、ロシア革命後にロシアを旅行中、1922 年に行方不明になってしまいました。どうやらスパイと疑われたようです。調査だったり取材といっても、秘密スパイと疑われることがあり、これをどう避けるかが難しい点でしょう。折角楽しい旅が、最悪になるケースもあることです。

話政治問題が加わってくると、決まって重苦しくなります。折角のことですから、何とか楽しいも



のは無いかと思いますが、現在のイラン、イラクを含め中東方面を見てみると、年々明るさが無くなってきているようです。何故でしょうか。かつてペルシアを始め中東の世界で楽しみを見つけた人の話を調べてみると、大概アラビアン・ナイトを挙げる人が多いようです。ではわが国ではどうなのでしょう。千一夜など子供の読む本とでも思っている人は多いのではないのでしょうか。

これは私の考えですが、ペルシアやアラビアを含めた広い意味での中東の世界を、日本人が一番知らないのではないのでしょうか。だからその夜の楽しみも分からない。ごく最近はそうでもなくなりましたが、わが国では「アラビアン・ナイト」の良い概説書が無かったような気がします。実際のところ、アラビアン・ナイトの内容は大変多岐な上、いろいろな版があり、こういった国々の風俗習慣をいくらか知っていないと、中々理解が難しいのです。ですから逆にこれからいろいろ学ぶことが出来る筈です。

大人たちが小馬鹿にした千一夜の世界を、上手に、然も巧みに料理しリライトして、童話作品や詩に作り直したのは、宮澤賢治だったような気がします。彼の作品は初めは大人は読みませんでした。彼が何より優れていたと思える点は、ペルシアやアラビアの物語の世界を見事に描いたことでしょう。これは簡単そうですが、実は中々難しいことです。彼は地質学を学んでいたもので、岩石や鉱物について出てきます。宝石としてトルコ石や紅玉髓、植物としてはチューリップやケシの花も、花壇設計すら入っていますし、野ブドウやそれから作るワインすら登場します。それにイスラム教のまだ入って来ない頃のガンダーラ地方の仏教文化に触れられていて、ペルシアの古代文化をいろいろ示唆してくれます。読んでいて重苦しくないことは、政治的な背景が無いからでしょう。それに比べれば現代の中東情勢は、明るさがありません。不幸なことと思うしかありません。

—了—

## 【備考】

2013年10月1日、金子民雄さんの講演会が第26回雲南懇話会として開催されました。

この時の講演テープを起こし、その成果品（試作品）を編集の目的で、2014年3月初旬、金子さん宛に郵送しました。話し言葉のままでしたし、聞き取れなかった箇所、確認したい箇所も多くあった為です。

2014年4月、金子民雄さんから「講演会参加者へのお詫びの一言」に添えて、文字通りの自筆の「講演録」を頂戴しました。それが「本稿」です。

400字詰め原稿用紙に、大よそ28,000文字が流麗に躍る、一気に書き下ろされた大冊でした！

2015年4月、久々に懇談する機会があり、その席で当方で編集し雲南懇話会HPに収納することなど、念の為の確認をさせていただき了承されましたので、ここにアップした次第です。（文責、前田栄三）